



志度高だより 一飛翔の窓一

第116号
(H22.11.12)

「さて釣果は？」

今日も疲れたな。さて帰るとするか。鞆を手に立ち上がったら、携帯電話が鳴り始めた。こういうときの携帯電話は要注意。でようか、それとも不在を決め込むか。しかし、立場上でないわけにもいかない。

携帯の画面を見ると気の置けない友人からだった。「グレが釣れてな。刺身にしたところだから、今から持って行く」「持って来ると言っても大変だよ」彼の家からすると、少なくとも40キロはある。それを今から持って来るといふ。「もう高速に乗ったから」「ええ！？ 高速に」あまりの性急さに言葉も出ない。でも、今どき友人のためにわざわざ高速を飛ばして刺身を持ってきてくれる人間はそうざらにいない。神、仏と感謝すべきだな。ああ有り難や、有り難や。

待つこと30分。どうもBMWを超特急ですっ飛ばしてきたらしい。目の前に差し出されたのは、ずしりと重そうなグレの刺身。肉がピンク色でいかにも新鮮だ。「早く帰って食べよ」彼はそう言うなり車に乗り込むと、さっさと帰っていった。胸がぐつと熱くなった。いいね、持つべきものは友だ。友達といっても普通の友達じゃだめだ。背中で人生が語れる友達というやつかな。

中国には、一生の楽しみを知ろうとすれば魚釣りをしろ、というような諺があるらしい。何かの本で読んだことがある。魚釣りくらいで何が一生の楽しみだ、阿呆らしい。そう思う人も多いはず。しかし、まんざら当たってないとも言えない。

今はめったに行かないが、小学校のとき、学校から帰ると毎日魚釣りをしていた。牛小屋のミミズを掘り、竹竿を担いで近所の池へ行く。結構大きい池で、1メートル半ほどの台湾ドジョウ（雷魚）なんかも泳いでいた。そこで釣り糸を垂れ、何もかも忘れて何時間も過ごした。

でもどうして魚釣りがあんなに楽しかったのだろう。多分、今か今かと期待に胸膨らませて待つ緊張感がたまらなかったのだろう。魚がいつ来るか、片時も浮きから目を離せなかった。その眼差しは真剣そのもので、青空の果肉を貫く清い鋭さがあった。また、浮きが水面下に沈み、竿をぐいと引き上げたときの、クククッと伝わってくる魚の動きが何とも言えなかった。魚釣りをする人は、こういったものすべてが好きなのだろう。たとえ釣果がなくても、夢を見させてくれる時間をたっぷり楽しむことができるから。それは鋭い背びれでピシヤリ現実を切り捨てるのに似ている。

ところで人生の釣果とは？ 地位とか名誉を手に入れることか。

例えば、二人の男がいたとしよう。一人は貧しい家に生まれ、勉強もろくすっぽできない。しかし手先は器用だった。食い扶持を減らすために、尋常小学校を卒業するとすぐに大工の丁稚奉公に出た。

毎日親方のもとで下働きと厳しい修行。もう一人は裕福な家に生まれ、なに不自由なく育った。頭も良く、いつもラインの一番先頭を歩き、エリートコースを進んだ。金に糸目をつけない浪費生活が待っていた。三十有余年が流れ、エリートコースを歩いた男は見栄と虚栄に身を滅ぼし、一方、辛い丁稚奉公に耐えたのろまでドジな男は、当代きっての名宮大工になっていた。

こんな話は吐いて捨てるほどある。どっちの男に釣果があったか、それを問うものではない。湯水の如く金をつかった男は、それなりに楽しい思いをしたのだからそれでいい。丁稚奉公に出た男は、かつては貧しかったが

今は成功し安楽な生活を送っているので、これもまたよし。もしかすると、人生に釣果はないのかもしれない。人は「よーし、何かをこの手につかんでやるぞ」と、拳をギュッと握りしめて生まれてくる。しかし、死ぬときは万人みな等しく手を開いている。あたかも「空」、「無」を示唆するように。だから、生かされている瞬間瞬間を味わい尽くすつもりで生きることが大切なのだ。人生の釣果とは、命という時間の貴さを釣り上げることかもしれない。

口に運んだグレの刺身は顎が落ちるまでには至らなかったが、その夕方を美味で飾るには十分だった。自殺者が年間3万人を超える今の世の中、些細な楽しみを見つけることさえ至難の業と言われてもしかたない。ましてや一生の楽しみとなると……。まあそう堅いこと言わずに、グレの一切れでも食ってご覧なさい。そしたら妙案が口の中で跳ねるかもしれませんぞ。

